

1月10日（金）18・30～20・30 キャンパスポート大阪

戦後復興の夢と現実—占領下の街づくり—

焼け跡と闇市の情景が残る街で戦後の都市建設がはじまった。その復興計画にはどんな新しい大阪像が描かれ、街や都市自治はどう変化したのでしょうか。そして約7年間進駐した占領軍の影響は？

戦後大阪のスタート状況を同時代史的に振り返りながら再考します。

<講師> 芝村篤樹（しばむら・あつき）

1941年兵庫県生まれ、桃山学院大学名誉教授、専門は日本近現代史。「都市の近代・大阪の20世紀」（思文閣出版）「関一 都市思想のパイオニア」（松籟社）「日本近代都市の成立—1920・30年代の大阪」（松籟社）など。

2月7日（金）18・30～20・30 キャンパスポート大阪

焼け野原で誕生した夕刊紙—華僑が発行した「国際新聞」—

GHQは原則として言論の自由を認めつつ占領政策に反する言論を取り締まる方針を明示。一方で有力紙に対抗させて新興紙などの育成をはかった。大阪では新興紙として夕刊紙が次々に登場。そのトップバッターが「国際新聞」だった。華僑が発行したこの夕刊紙に3年間勤務した経験をもとに大阪・夕刊紙の興亡をたどっていきます。

<講師> 福山琢磨（ふくやま・たくま）

1934年鳥取県生まれ、自分史研究者。51年、夕刊紙「国際新聞」に勤務、81年、新風書房を設立、季刊誌「大阪春秋」を発行するとともに「自分史づくり」の普及と指導にあたる。「孫たちへの証言」＝計26集＝（新風書房）などを刊行。

3月7日（金）18・30～20・30 キャンパスポート大阪

「ど根性」から含羞へ—“帝塚山派” への評価

江戸の荒事に対し、大坂の和事は都市をやわらか色に染めていました。原色でどぎつく、品位に欠け、そんな大阪像が氾濫する中で、私たちは大切に美しい文学をないがしろにしすぎたのです。庄野英二、潤三、阪田寛夫、藤沢恒夫、杉山平一…。帝塚山学院にかかわった一群の作家を“帝塚山派”と呼び、再評価の光を当てていきます。

<講師> 木津川計（きづかわ・けい）

1935年、高知市生まれ。68年、雑誌「上方芸能」を創刊、81年からNHKラジオで「ラジオエッセイ」を担当、07年「木津川計の一人語り劇場」を旗揚げ。元立命館大学教授。12年から大阪自由大学学長。「人間と文化」（岩波書店）「上方の笑い」（講談社現代新書）「ことばの身づくろい」（上方芸能出版センター）など。